

「車いすからパラリンピック、そして2020に向けて」

●講師紹介 田口 亜希 氏

日本の女子射撃選手。アテネパラリンピック(2004)・北京パラリンピック(2008)・ロンドンパラリンピック(2012)と3大会連続出場を果たし、2010年アジアパラ競技大会では3位、銅メダルを獲得しました。大学卒業後には、優船クルーズ株式会社に入社し、旅客船「飛鳥」の乗組員として世界中を航海しました。その後、若くして脊髄の血管の病気を発症し、車いす生活になったものの、友人の勧めでビームライフルに出会いました。現在は、一般社団法人日本パラリンピアンズ協会理事として、全国で講演会なども行っています。

●講演内容



大学卒業後3年間は、船の上でパーサーのお仕事をし、世界中を周遊していた話から、病気を発症した後の闘病生活やリハビリにいたるまでの話をしてくださいました。手術どころか、一生車いす生活を強いられることに驚愕し、目標を持つことを恐れたと言います。しかし、入院後にお見舞いに来る同僚や友人の輝いている姿を見て一念発起し、それまでの射撃への憧れとコーチとの出会いから銃免許を取得し、パラリンピアンまで登りつめました。

「残されたもので何ができるか」と考えたときに、胸から上と両手が使えることに感謝し、銃にのめり込むようになったようです。射撃で最も必要とされる力は集中力と精神力の二つで、時間や我を忘れてしまうということでした。また、自分がパラリンピアンとして銅メダルを獲得できたことは、尊敬できるコーチとの出会い、同じ志を持つ人との出会いによるものだとおっしゃっていました。

それから、「バリアフリー」という言葉も講演の中で繰り返し述べられ、自分が障害者になって初めてそのバリアフリーの設計やデザインに驚きと感謝をもたれたそうです。最近でこそ「バリアフリー」という言葉をよく耳にするようになりましたが、日本においては、実際にはみんなが暮らしやすい世の中にはなっていないことを説明してくださいました。

講演感想文

- 前向きに進み、今できること、自分ができる範囲で色々なことに取り組んでいる田口さんは、とても輝いて見えました。
- 今回の講演を聞いて、自分を見つめ直すことの大切さを感じました。
- “共生社会”というのは、健常者が障害者を助けるのではなく、共に生きるということだと思うので、毎日常に周囲を意識しながら行動して、どんな人にも優しく、平等に接するようにしていきたいと思います。
- 身近に障害者がいることから、特別支援学校の先生になりたいと思っています。
- 今日の講演の中で1番印象に残ったことは、「障害を持つ人たちの多くが、外に出られていない」ということでした。最近ではバリアフリーな設計の建物をよく見かけるので、みんなが暮らしやすい世の中になってきているとずっと思っていました。しかし、それはただの思い込みすぎず、本当の意味でみんなが暮らしやすい世の中になどなっていないのだと気付かされました。